

「だって」の意味：「埋める」という接続関係

大津，隆広
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/6796485>

出版情報：言語科学．43，pp.77-86，2008-03-31．九州大学大学院言語文化研究院言語研究会
バージョン：
権利関係：



「だって」の意味

- 「埋める」という接続関係 -

大津 隆 広

1. はじめに

談話の冒頭で用いられる接続表現としての「だって」の意味をめぐっては、辞書的定義、談話分析、発話行為論などの立場からこれまでさまざまな説明がなされてきた。

まずは、「だって」の多様な用法とそれが使用されるコンテキストをコーパス（『男性のことば・職場編』および『女性のことば・職場編』）からの引用を用いて考えてみよう（太字は筆者）。

- (1) ひらがなは、斜め読みに適さないね。**だって**、こう、斜め読みってたいい漢字のほうでばばばば一っていくじゃない。(3205)
- (2) A: 月曜日の1時間目、わたしの授業なの。さげないように、戻すようにいってください。
B: **だって**、あしたもあるじゃん。(4400-4402)
- (3) A: コンドミニアムなんか全然広いさあ。
B: **だって**ちゃんとー、ベッドルームがふたつみつつとかあるのもあるでしょ。(638-639)
- (4) A: あー、もう、なんかあんまし乗り気じゃなくなっているんじゃない。
B: えっ、そんなことないわよー、ただ、〇〇くんが、ほんとにどうかってゆうのが心配なだけけど。
A: そんないまさら、いまさら、なにー。
B: そうじゃない。**だって**。(7104-7107)
- (5) A: 〇〇ちゃんの顔見ながらいえない。
B: なんでー。
A: **だってだって**。(10496-10498)

(1)の「だって」は独話的に用いられた典型的な意味をもち、証拠を挙げることで話し手の意見の正当化を行っており、英語の *because* の意味に近い用法である。(2)は対話的に用いられ、英語の *but* の意味を当てはめることができる例である。この用法は、相手の意見への不一致を表す発話(*disagreement utterance*)として効力をもつものに対して、一方、(3)では、相手の意見への一致を表す発話(*agreement utterance*)として用いられている。(4)では、その後に

何も構成要素を続けずに用いられた対話の例であり、(5)は情報伝達というよりも、もっと感情的な意味合いが強く感じられる例である。このように、「だって」の使用には、独話と対話のコンテキスト、意見の一致と不一致の表明、論理と感情など、さまざまに異なる側面が含まれていると言える。

(2)-(5)は独話型で用いられる「正当化」の意味を持つ「だって」の用法(1)から拡張されたさまざまな用法だと考えることができるが、特に disagreement utterance のみならず agreement utterance にも使用されるという事実は、「だって」の意味の記述を複雑なものにしていると同時に興味深い。他の接続表現と同様に、「だって」の意味の分析は、「だって」が使用されるコンテキストにそれぞれの意味を与える多義的説明と、一義的に考える統一的説明に大きく分けることができる。本論では、認知の経済性の考え方に基づき、「だって」の意味は一義であると考え、その統一的説明を試みる。

2. 「だって」の意味に関するこれまでの説明

2.1. 多義的説明

森田 (1980)は、「だって」の多義的意味を大きく2つに分類し、それぞれの意味の記述を行っている。一つは(6)や(7)のように独話や対話で用いられ、理由説明の接続詞「なぜなら」や「というのは」に便宜上置き換え可能な用法である。もうひとつは、対話で用いられ、相手の提案に従わない理由を述べたり、相手の意見を否定する理由を提示する(8)のような用法である。この用法は「でも」や「けれども」で置き換えが可能である。

(6) 遊びに行ってはいけません。だって、まだ宿題が終わっていないんでしょう。

(7) A: あら、テレビ消しちゃったの。

B: だって、つまらないんだもの。

(8) A: 試験前だから勉強しなさい。

B: だって、疲れちゃったんだもの。

森田の「だって」の分析は辞書的定義としては重要ではあるが、その典型的な例のみを取り扱うために、さまざまな「だって」の用法を説明できる力を持ってはいない。

メイナード (1992)において、「だって」がもつ語用論的意味は、森田と同様に、話者交替のコンテキストで but 的なものと、話者交替のないコンテキストで because 的なものに分けられる。メイナードは会話分析の観点から、「だって」の中心的な談話機能を次のように「自己正当化(self-justification)」だと考える。

(9) [X だって Y]では、相手が「反対」又は「挑戦」した、又は、する可能性がある
と認められるコンテキストで、自分の立場を正当化する意図を前もって知らせる
役目をする (p. 187)。

メイナードの「X(立場)だって Y(支持)」という二項による論理関係と異なり、蓮沼 (1995)は次のように三項における論理関係のスキーマを用いて「だって」の意味を説明する。

(10) [O だけれども P (なぜなら) Q だから]

O: 自分の立場と対立すると話し手によって解釈されるような聞き手(や第三者)

の発話や行動

P: 話し手の立場を表す発話や行動

Q: 話し手の立場を正当化する発話

蓮沼の三項説明の特徴は、「だって」が用いられるコンテキストにおいて聞き手の立場 O と話し手の立場 P の2つの立場を考慮することにある。「だって」の用法は、話者交替の有無や立場の対立の顕在化などのコンテキストの違いにより、O/P と Q の具現化の違いが生じることによって次の4タイプに分かれると考える。

(11) 抗弁型・挑戦型: O だって Q

補足型: P だって Q

折衷型: 挑戦型と補足型の融合

抗弁型・挑戦型では、話者交替による対話において相手の立場への反論として、「だって」節により自己正当化が行われる。補足型の典型はいわゆる独話型の発話で用いられ、理由や根拠の提示により話し手の立場が正当化される。折衷型は、対立と支持の両方の意味を兼ね備えた用法である。

以上の多義的説明では、接続表現の「だって」を but と because の関係で捉えており、それ以外の(3)-(5)のような用法はあまり説明されていない。また、当然ながら、それぞれの用法の関連性についての言及も不十分である。

2.2. 一義的説明

多義的説明に対して、同一のスキーマにより統一的に「だって」の意味の説明を行う試みも見られる。

滝浦 (2003)の「だって」の統一的説明は、蓮沼(1995)の三項説明の不備の指摘から提示されたものであるという意味において消極的である。滝浦は蓮沼の分析の不備を指摘するために(12)を挙げる。

(12) 「おい、まだか? だって、急ぐんだろ。」(p.37)

(12)は相手の立場 O と話し手の立場 P との対立を表明する「O だって Q」の「挑戦型」に属すべきものであるが、明示されているのは話し手の立場のみであるために、蓮沼の分類では「P だって Q」の「補足型」に誤って分類されてしまうことになる。以上の指摘をもとに、滝浦は「だって」の談話機能について、次のような単純な統一的説明を挙げる。

(13) (O や P が明示的に述べられているか否かにかかわらず)

[だって Q]を述べることで P を正当化しようとする (p.37)

しかし、どのような場合であっても P の自己正当化こそが「だって」の語用論的意味であるという主張は、(3)のような agreement utterance の例をどのように説明するのであろうか。(3)において「だって」を含む発話の P に相当するものは明示されていないので、そもそも「自己正当化」とは考えにくいと思われる。

沖(1996)は、滝浦よりも詳細に「だって」の談話機能の一義的説明を展開している。その骨子は、1)「だって」の基本的意味は<理由説明+正当化>にある、2)「だって」が対話の冒

頭で用いられた場合、<相手の意図に反する主張>を表している、3)「だって」の前節には省略の機構が働いており、「だって」は復元された命題内容を理由説明する、の3点である。沖の例(14)-(16)を見てみよう（省略された命題内容を表す括弧は筆者）。

- (14) A: あら、テレビ消しちゃったの。
B: (消したよ。) だって、つまらないんだもの。
(15) A: 試験前だから勉強しなさい。
B: (勉強しない。) だって、疲れちゃったんだもの。
(16) A: ごめん。遅れちゃった。
B: (いいよ。) だって、今日学校あったもんね。」

(14)は対話型での理由説明（「なぜなら」に置換可能なもの）、(15)は相手の立場への反論（「でも」に置換可能なもの）、(16)は agreement utterance での「だって」である。これらすべてにおいて、括弧内に記した「だって」に先行する節が省略されていると考える。しかし、(14)と(16)が示すように、対話の冒頭の「だって」が必ずしも相手の意図に反する主張を表すとは限らない。沖(2006)では、前述の沖(1996)の骨子2を取り下げ、「だって」の語義<理由説明+正当化>は、(17)のフレームの中に具体的な値を入れることで達成されると修正している。

(17) [状況 : N]

A: [X]

B: [P だって Q]

つまり、N（両者が対立的か好意的かなどの関係）と X（相手の発言）の関係により、P（省略された命題内容）が相手の意図に反する主張であるか相手への共感であるかが決まる。沖(2006)の統一的説明の特徴は、(16)のような agreement utterance においても、「だって」による理由説明の対象となる命題 P が省略されており、かつ「だって」はその P を正当化していると考えることにある。さらに、沖の例(18)を見てみよう（省略された命題内容を表す括弧は筆者）。

- (18) A: 明日スキーに行くんだ。
B: (そう。よかったね。) だって、ひさびさのお休みだもんね。

この例での「正当化」のあり方とは、相手の立場に立った上での P（つまり、復元された「そう。よかったね」という「だって」使用話者の命題）の正当化だと説明される。しかし、(16)や(18)の例において、P の復元そのものがどの程度意味のあるものであるのか疑問に感じられる。直観的に考えても、「だって」節は話し手 B 自身の省略された命題内容 P を正当化しているというよりも、相手の発話 A（厳密には A の解釈）に理由を与えることでその行動や選択が妥当なものであると主張している。むしろ、正当化と同意という異なる発話行為が「だって」をめぐってどのように結びつくのかという問題の解決の方が重要であろう。

山田 (2006)は関連性理論のメタ表示という認知の仕組みを用いて「だって」の意味の統一的説明を行う。「P だって Q」というスキーマ(19)の中で、「だって」の意味機能は次のように捉えられている。

(19) P だって Q

P: 先行発話の命題内容

R: P のメタ表示された想定

Q: R への理由・根拠

スキーマ内の R は「だって」の先行発話からメタ表示された想定（つまり、P の高次表意）であり、「だって」が導く命題内容 Q は、P ではなくその高次表意 R（発話 P のメタ表示的思考）への理由・根拠だと解釈される。こう考えると、disagreement utterance (20) も agreement utterance (21) も、ともに次のように統一的に説明可能となる（以下は山田(2006)の例）。

(20) A: またピーマン残して！

B: だって、苦いんだもん。

P: ピーマンを残すべきではない（食べるべきである）。

R: 話し手 B は<P>には応じられない。

Q: 話し手 B は<P>には応じられない。なぜなら、ピーマンは苦いから。

(21) A: 明日早く終わるから映画に行かない？

B: だって、招待券あるしね。

P: A は話し手 B と映画に行きたい。

R: 話し手 B は<P>に応じる。

Q: 話し手 B は<P>に応じる。なぜなら、招待券があるから。

「だって」は先行発話から解釈された高次表意にアクセスし、それが「だって」節で述べられた理由や根拠の対象であると処理せよという手続き的意味を記号化していることになる (p.129)。しかし、(21)の先行発話「明日早く終わるから映画に行かない？」には(22)のように「だって」を用いて相手の意図に反する主張として返答することも等しく可能である。

(22) A: 明日早く終わるから映画に行かない？

B: だって、残業あるしね。

同じ先行発話をもつ状況において、「だって」という表現が(21)では相手の発話のメタ表示としての意見の不一致を表す高次表意をポイントし、(22)では逆に相手の意見の一致を表す高次表意をポイントすると説明する場合、全く逆の方向へ推論を導くのはなぜかが説明されていないということになる。おそらく、選ばれる解釈は発話状況における両話者の関係と先行発話との推論計算により関連性が高い解釈であると説明することが可能であろう。しかし、その場合も、結局、自己正当化と同意という異なる認知効果がどうして「だって」という同一の言語表現により活性化されるのかという問題が残される。

こうした一義的説明においても、「だって」による自己正当化／同意の認知効果の派生の仕組みが明らかにならない限り、「自己正当化」や「理由づけ」という談話機能だけでは「だって」の意味の本質は捉えられていないように思われる。

3. 「だって」の意味再考

2.2 で触れたように、滝浦 (2003) はメイナードや蓮沼が用いている「立場」という概念を疑問視しているものと考えられる。(12) は確かに相手との立場の対立の中で用いられてはい

るが、話し手自身の何らかの見解に対して「だって」節がその根拠を与えていると考えるのが正しい解釈である。さらに、(23)は蓮沼(1995)で取り上げられた「P だって Q」の補足型に属する例である。

(23) A: お料理の手際、いいですね。

B: だって、仕事をもっていたら料理に時間かけられませんからね。

滝浦は、ここでも先行発話 A は相手の立場であるために、蓮沼の分類では「O だって Q」の抗弁・挑戦型になるという矛盾が生じてしまうという疑問を投げかけている。

(12)や(23)の説明の矛盾を解決する方法は、「だって」が接続するのは、立場ではなく想定（個人が持っている概念表示の集合）であると考えることである。つまり、(12)において、「だって」節が理由の対象としているのは、相手や話し手の立場ではなく、「おい、まだか？」という発話から解釈される話し手の想定（「はやく支度を終えた方がよい」）である。また、(23)においては、「だって」節が接続するのは相手の立場や発話 A ではなく、話し手自身の非明示な想定（「料理は手際よくやらなくてはならない」）である。このように考えれば、(12)を「P だって Q」の補足型とする筆者の解釈も、(23)を「P だって Q」の補足型とする蓮沼の解釈も正しいことになる。

本論では、「だって」は発話から解釈された想定を接続する表現であると考え、その談話機能を三項からなる推論のスキーマ(24)のように考える。

(24) 「P だって Q」

O: 相手（聞き手）の想定

P: 話し手（「だって」使用話者）の想定

Q: 理由・根拠

蓮沼の三項説明と異なる点は2つある。まず、三項は蓮沼が定義したような「立場を表す発話や行動」ではなく、発話や行動から解釈される想定である（O も厳密には、相手の想定として話し手が解釈した想定となる）。次に、「O だって Q」「P だって Q」のような部分的顕在化により「だって」の意味の多様性を説明する蓮沼に対して、本論では「だって」の用法には三項すべてが関わり、多様な用法に関して統一的な説明が可能であると考え。

まず、独話における自己正当化の例(1)を見てみよう。

(1) ひらがなは、斜め読みに適さないね。**だって**、こう、斜め読みってたいい漢字のほうでばばばば一っっていくじゃない。(3205)

独話で用いられた場合、当然のこととして相手（聞き手）の想定を話し手が認識しているわけではない。しかし、自己正当化の本質は、単に自身の考え方に対して理由づけや根拠の提示を行うだけではなく、想定される相手の立場や考え方に影響を与えることであろう。何かを主張する話し手は常に相手との意見に違いを予測し、反論を受ける前に「だって」を用いて正当化を図るのである（メイナードの「だって」の性格づけ(9)もこの私見を支持していると思われる）。したがって、(1)における「だって」は(25)のような推論スキーマにおいて機能していると言える。

(25) 相手の想定：ひらがなが斜め読みに適しているかどうかに関するさまざまな想定

話し手の想定：ひらがなは斜め読みには適さない。

理由・根拠：斜め読みには漢字が適している。

一方、相手の想定は対話型になると言語的に顕在化する。教員らが教室の床のワックスがけのために机を下げて念入りに掃除をしようとしている場面からの引用(2)を見てみよう。

(2) A: 月曜日の1時間目、わたしの授業なの。さげないように、戻すようにいってください。

B: **だって**、あしたもあるじゃん。(4400-4402)

(2)における「だって」は(26)のような推論スキーマの中で機能している。

(26) 相手の想定：机を下げて床を念入りに掃除しなくてはならない。

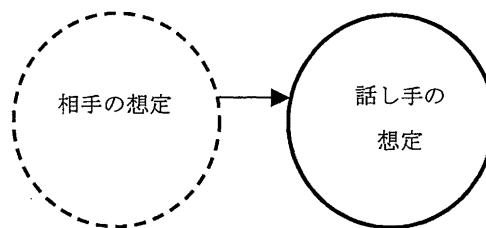
話し手の想定：今日念入りに床掃除をしなくてもよい。

理由・根拠：床掃除は明日でもやれる。

相手に相当する A は床掃除を今日中にやらなくてはならないと思い込んでいるのに対して、話し手 B は「だって」節で共有された情報をもとに理由を述べることで、今日中にやらなくてもかまわないと非明示的に主張をしている。

以上、(1)と(2)の自己正当化における「だって」の談話機能を図式化すると図1のようになるであろう。

図1



相手の想定が破線で示されているのは、対話型の場合に特定の想定が談話において言語化されているわけでも、話し手が相手の特定の想定を認識しているわけでもないことを表している。それはあくまでも話し手により仮定された相手の想定である。双方の想定を繋ぐ矢印は「だって」節の命題内容により理由を提示することで相手の想定を話し手の想定に一致させる自己正当化という発話行為を表している。

接続表現「だって」が担う「話し手の想定と相手の想定的一致」という談話における機能を抽象化すれば「話し手の想定と相手の想定との認知的隔たりの最小限化」と言い換えることが可能であろう。一方、認知的隔たりを埋めるという談話機能は、相手の立場への同意や共感という発話行為の遂行に貢献する「だって」の用法とは無縁のように思われるであろうが、そうではない。(3)を見てみよう。

(3) A: コンドミニアムなんか全然広いしさぁ。

B: **だって**ちゃんと一、ベッドルームがふたつみつつかあるのもあるでしょ。
(638-639)

この例では(1)や(2)とは異なり、話し手と相手の間で意見の共有が行われている。推論スキーマに必要な三項の想定は(27)のようになるであろう。

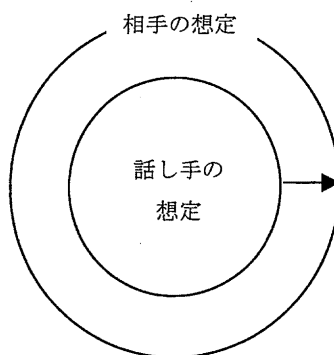
(27) 相手の想定：コンドミニアムは普通のホテルよりも広い。

話し手の想定：コンドミニアムの広さへの同意。

理由・根拠：コンドミニアムにはベッドルームが2つや3つもある。

しかし、推論スキーマ(27)における両者の想定は必ずしも同じではない。コミュニケーションにおいて、2人の会話参加者の意見や見解が100%同じではあり得ないからである。(27)のような例は親密な関係にある人同士の会話で生じるとされる「だって」の用法(沖(2006: 193))ではあるが、仮に同意見だと互いに認識していたとしても、相手の心の中は完全には読むことはできない。発話解釈において人はマインドリードという認知能力を用いて相手の心の中を読もうとするが、常に人はそれが完全にはできず、少しでも相手との心の一致を測ろうと努力する。「そうだね」とだけ返答せずに、「だって」を用いて相手の意見に対してわざわざ理由を加えるのは、隔たりを完全に埋めたいという心の働きによるものであろう。この用法に関する談話機能の議論を図式化したものが図2である。

図2



しかし、想定の間隔はどんな場合にでも埋めようとするわけではない。(28)において、発話の冒頭で用いられた「だって」に対しておかしいと感じる日本語母語話者がいるという沖(2006)の指摘は興味深い。

(28) A: おそうじなさい。

B: ? だって、きれいにしなけりやいけないものね。(沖 (2006: 199))

掃除をせよという命令に対して認識の溝を埋める場合とは、話し手B自身も日頃から掃除をしよう、あるいはしなくてはならないと思っている場合である。そのような特定のコンテキストがなければ、話し手Bには相手の想定との溝を埋める(「掃除をすべきだ」という意見の一致)という意識が働かないためにおかしいと感じられるのである。

「だって」節の後に具体的な理由や根拠が明示されなくなると、根拠がないままに正当化したい(あるいはそうせざるをえない)という気持ちが伝わるために、論理性よりもむしろ

話し手の感情的な自己正当化の態度が表明される。メイナード(1992)が、「だって」は話し手の発話態度や感情を表現する(p.184)と述べるように、理由づけ(自己正当化)に関わる論理と感情は切り離せない関係にある。(4)を見てみよう。

- (4) A: あー、もう、なんかあんまし乗り気じゃなくなっているんじゃない。
B: えっ、そんなことないわよー、ただ、〇〇くんが、ほんとにどうかってゆうのが心配なだけけど。
A: そんないまさら、いまさら、なにー。
B: そうじゃない、**だって**。(7104-7107)

乗り気ではないのではないかという相手Aに対して、話し手Bはそんなことはないと言いたいが、適切な根拠が見つからないでいる。理由づけ(自己正当化)の論理よりもその目的達成への願望が強く伝達されるのは、「だって」の推論スキーマ(24)と自己正当化の図1において、相手の想定(「話し手Bは乗り気ではない」というAの想定)を自分の想定(「根拠は見つからないが、乗り気だ」というB自身の想定)に一致させたいという「だって」の談話機能によるものであると言えよう。

さらに、「だって」一語の発話になると、自己正当化の論理性よりもますます話し手の感情の方が伝達される。(5)において、「〇〇ちゃんの顔が見れないのはどうしてか」という相手Bの問いに対して、話し手Aは根拠を明示せずに、「だって」をただ繰り返しているだけである。

- (5) A: 〇〇ちゃんの顔見ながらいえない。
B: なんでー。
A: **だってだって**。(10496-10498)

話し手Aの「だってだって」の中には、理由は明言しない(すぐには明言できない)けれど、顔を見ながら話ができない理由を察してくれて理解してほしいという気持ちがよく表れている。この例も(4)と同様に、自分の想定(「〇〇ちゃんの顔を見ながら話ができない」)と予想される相手Bの想定(「〇〇ちゃんの顔を見ながら話くらいできるだろう」)の間に認識の隔たりがあると察知したために、「だって」を連発してすかさずそれを埋めようとしている。結局、両者の認識の隔たりを埋めるということが、相手Bの立場を「だって」使用話者であるAの立場へと変えることになるのである。

以上、典型的な自己正当化の例、相手への同意の例、論理性よりも感情を伝達する例などさまざまな「だって」の用法を概観してきた。それらのすべてにおいて、「だって」の談話機能は「自分の認識と相手の認識の隔たりを埋める」ことであると結論づけた。典型的な自己正当化の場合にはしばしば叱責をこめた半ば強引な理由づけ、相手の立場への同意の場合は相手への共感や同調、「だって」一語を用いた発話の場合にはしばしば懇願、これらのさまざまな発話態度もすべて、互いの認識の隔たりを埋めるという「だって」の談話機能により生じていると考えられる。

4. おわりに

接続表現「だって」の談話機能はこれまで「自己正当化」「理由説明」などとさまざまに定義されてきた。本論では、「だって」が正当化と同意の2つのコンテキストで用いられること、論理表現であるにも関わらず話し手の感情をも表すことなどの側面に着目し、「だって」の談話機能を「相手との認知的隔たりを埋める」と考える。沖(2006)によれば、同意や共感を担う「だって」は現代の新用法であり、十分な研究がなされているとは言えない。しかし、少なくともそうした新用法への展開は、認識の溝の最小限化というコミュニケーション上の目的と合致したものであると言えよう。

[付記] 本研究の一部は、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C) (課題番号 17520330) の成果である。

参考文献

- 蓮沼昭子 (1995) 「「談話接続語「だって」について」『姫路獨協大学外国語学部紀要』第4号, 265-281.
- Kubo, Susumu (1999) “On an Illocutionary Connective *Datte*,” ed. by Ken Turner, *The Semantics /Pragmatics Interface from Different Points of View*, 293-315, Elsevier, Oxford.
- メイナード泉子 (1992) 『会話分析』くろしお出版、東京.
- 森田良行 (1980) 『基礎日本語2』角川書店、東京.
- Noh, Eun-Ju (2000) *Metarepresentation*, John Benjamins, Amsterdam.
- 沖裕子 (1996) 「対話型接続詞における省略の機構と逆接-「だって」と「なぜなら」「でも」-」, 中条修編『論集 言葉と教育』97-111, 和泉書院, 大阪.
- 沖裕子 (2006) 『日本語談話論』和泉書院, 大阪.
- Sperber, Dan and Wilson, Deirdre (1986/1995) *Relevance: Communication and Cognition*, Blackwell, Oxford.
- 滝浦真人 (2003) 「「だって」の語用論—演算子が演算するもの—」『月刊言語』Vol.32, No.3, 33-39.
- Wilson, Deirdre (2000) “Metarepresentation in Linguistic Communication,” ed. by Dan Sperber, *Metarepresentations: a Multidisciplinary Perspective*, 411-448, Oxford University Press, Oxford.
- 山田大介 (2006) 「「だって」の意味論」『日本語用論学会第8回大会発表論文集』, 129-136.

例文出典

- 現代日本語研究会編 (2002) 『男性のことば・職場編』ひつじ書房、東京.
- 現代日本語研究会編 (2002) 『女性のことば・職場編』ひつじ書房、東京.